

オートプシー・ イメージング [Ai]

第八弾

高精度の死因究明に向けた定量化技術の最新動向

企画協力：塩谷清司 聖隷富士病院診療部放射線科部長

今や社会インフラとして定着したオートプシー・イメージング (Ai) は、死因究明の手段として重要な位置づけにあります。各都道府県での積極的なAiの体制整備が進む中で、さらに高精度な死因究明に向けて画像解析・診断における定量化技術の研究開発が取り組まれています。そこで、Ai特集第八弾では、Aiを取り巻く現状を整理した上で、画像解析・診断における定量化技術の研究開発の最前線に焦点を当てます。このほか、Aiにおける放射線科医・診療放射線技師の役割、地域医療におけるAi、検査・読影の最新動向、海外の動向を取り上げます。

高精度の死因究明に向けた定量化技術の最新動向

オートプシー・
イメージング
[Ai]
第八弾

I Aiを取り巻く現状と将来展望

1. 総論

—— Ai情報センターの立場から見た現状

山本 正二 一般財団法人 Ai情報センター代表理事

2018年7月28日(土)、29日(日)、つくば国際会議場大ホールにて、第16回オートプシー・イメージング (Ai) 学会学術総会が開催された。学会への参加者は329名で、450人を収容する大ホールでないと学会が開催できなくなるほどAi学会の規模が大きくなった。茨城県つくば市は、日本でのAi発祥の地であり、オープニング講演をいただいた大橋敬良先生(元・筑波メディカルセンター病院救命救急センター長)からの話をうかがい、1985年に開院した筑波メディカルセンター病院でpost mortem computed tomography (PMCT)の全例実施を開始してから30年経過して、

日本に社会インフラとしてAiが根づきつつあることを実感した。

今後少子高齢化が急速に進む日本では、多死社会が到来し、Aiの重要性がさらに高まることが予想される。この少子高齢化の課題先進国でもある日本での取り組みは、今後中国をはじめとする諸外国でも活用されることが予想される。日本でのAiの知見をうまく活用すれば、社会インフラシステムとしてグローバル展開も可能となる。本稿では、現在筆者が所属するAi情報センターを通してAiを取り巻く現状を整理し、高精度の死因究明という社会ニーズに応えるAiの現状と未来を展望する。

Ai情報センターについて

今回の特集号を手にした読者の方々には、すでにAi情報センターについてはご存じのことと思うが、再度Aiの現状を確認するために振り返ってみたい。

Aiの提唱者である海堂 尊氏は、2007年に発刊された『死因不明社会』の中で、Aiセンター構想について記載している。これは、各地におけるAiの拠点としてAiを実施できるセンターを設け、知見の集約活用を目的としたものである。その後、彼の母校でもある千葉